

螢のちから

竹田真砂子

出発は舞踊曲『蚊』でした。菊之丞を名乗っていらっしやった頃の尾上墨雪氏に、歴史上名の通った武将を踊ることが続いたのでちよつと一休みして、なにか軽いものにしたいたいとご希望があり、軽いものなら蚊でしようかと、なぜか即答して、私にとりまして最初の舞踊曲は、ちよい悪おやじの蚊になりました。

作曲は今藤政太郎氏でした。初対面でしたのに私、不躰にも、古曲と間違えられるような曲に作っていただきたいなどと注文をつけたのです。政太郎氏はにこにこ笑いながら面白がってください、実に楽しい、しかし、なんとなく雅で艶でおおらかな曲を作り上げてくださいました。その曲に当時の菊之丞氏が絶妙な振付をなさり、品位を保ちつつも少々軽率な蚊を、愉快に哀れに踊られたのです。そして、これがきっかけになって虫三部作を作ることになり、「螢」「蟬」と続きました。

このうちの「螢」が、家族を愛し故郷を愛する純粹な若者の心情を一挙手一投足にこめた踊

り手の、感動的な舞台から抜け出して、新たに演奏曲となって歩み始めました。心優しい作曲家、今藤政太郎氏が抱く、無意味な戦いへの怒りと悲しみが一匹の螢に託されて大曲となり、広い世界に発信されたのです。

日本の螢は概ねきれいな水辺に住み着きます。湿った水苔などに産み付けられた卵は三十日くらいで孵化して幼虫になりますと、淡水の中でカワニナなどを食べて十か月ほど過ごします。長い冬を越して成長した幼虫は雨上がりの夜、水から上がって土の中に三十日ほど過ごして蛹になり、さらに二週間ほどかけて羽化します。成虫になると螢はもう何も食べません。口にするものはきれいな水だけ。そうして一週間ほど日本の蒸し暑い夜を抒情的に彩って一生を終わります。

この日本独特の美しい螢が近年減りつつあるそうですが、それは人間が、螢の住みやすい場所をどんどん破壊しているせいでしょう。人間同士の戦いだけでなく、今や人間から地球を守る戦いにも、螢は象徴的な存在になっているようです。

巷にジングルベルが鳴り響く冬十二月。今宵、万葉の里にマエストロ政太郎の「螢」が魂の光を放ちます。どうぞお心静かに耳を傾けていただければと存じます。